４１．≪享保の改革で活躍した田中丘隅（きゅうぐ）と蓑笠之助（みのかさのすけ）≫

１７１６年（享保元)、徳川吉宗（注１）が将軍となって、拡大成長路線だった幕政を、緊縮安定路線に切り替え、地域づくりも仕組みからガラッと変えてしまいます。

１７２２年（享保７)、大名屋敷修景用水を供給していた江戸の４上水が廃止され（注２）玉川上水は、その一部の水が、分水網に流され農業用水に活用されます。１７２８年（享保１３）から見沼の遊水地は干拓されていきます。

これらを主導したのは、既存の行政組織ではなく、井沢弥惣兵衛（勘定吟味役：注３)、大岡忠相（江戸町奉行兼関東地方御用掛：注４）など、抜擢した有能な人材たちでした。

今回、ここで紹介するのは、富士山噴火の後遺症（注５）を断ち切るために酒匂川の治水で活躍した田中丘隅（注６）と蓑笠之助（注７）です。どちらも、関東地方御用掛の忠相に登用された人材です。

丘隅は、東海道川崎宿の名主として、１７０９年（宝永６)、多摩川の六郷渡しの経営を幕府から川崎宿に変えるなど、行政に民間活力を生かしていきます。１７２２年（享保７）には、吉宗に、「民間省要」を献上。これにより、幕政に旗本として参加することとなり、荒川・多摩川の治水工事を任され、そして酒匂川（さかわがわ）の治水対策を命じられます。

このとき、現場主任として登用されたのが、笠之助です。名前は、徳川家康が本能寺の変の直後、伊賀越えの危機を乗り切り三河国へ帰城した際、先祖が、蓑笠を提供したことに由来します。

酒匂川には、この２人の業績により築かれた堤防が、文明堤（注８）と呼ばれ、現存します。

注１：徳川吉宗（生没年：1684－1751 年、征夷大将軍在職年：1716－1745 年）

注２：４上水廃止は、儒学者室鳩巣が、吉宗に、江戸の火災の主因が上水網による地脈の変化であると建白したからです。室鳩巣は、為政者の意向を汲み、あえて非科学的御用学者を演じてしまったかもしれませんね。

注３：井沢弥惣兵衛（生没年：1654－1738 年）

注４：大岡忠相（生没年：1677－1752 年）：町火消「いろは組」創設するなど町奉行として有名ですが、新設された関東地方御用掛を兼務します。これにより、関東の広域インフラ行政に関与して業績を残します。赤坂の豊川稲荷は、忠相が勧進し創建したもの。

注５：江戸幕府は、富士山噴火により、小田原藩の中で降灰被害の多かった地域を直轄地とし、関東郡代の伊奈忠順（伊奈家第７代目）を砂除川浚（すなよけかわざらい）奉行に任命して復興に当たらせます。このとき、被災民の救済に尽力し、地元から伊奈神社が作られ、神様となっています。しかし、酒匂川の土石流被害は、収まっていませんでした。

注６：田中丘隅（生没年 1662－1730 年）：１６８８年（元禄元）、多摩川の六郷橋が洪水で流出した際に、再架橋を止めさせ渡しとさせます。そしてその永代渡船権を川崎宿として譲り受け、その渡船料により、東海道の駅伝制に伴う地元負担に喘いでいた川崎宿の財政を好転させます。

注７：蓑笠之助（生没年 1687－1771 年）：技術者の一族に生まれ、仕官がかなわない時には、猿楽師で生計を立てていました。技能と芸能は近い領域だったかもしれません。

注８：古代中国で治水を行った「禹（う）」の忌み名が「文明」であり、それにあやかって名付けられました。

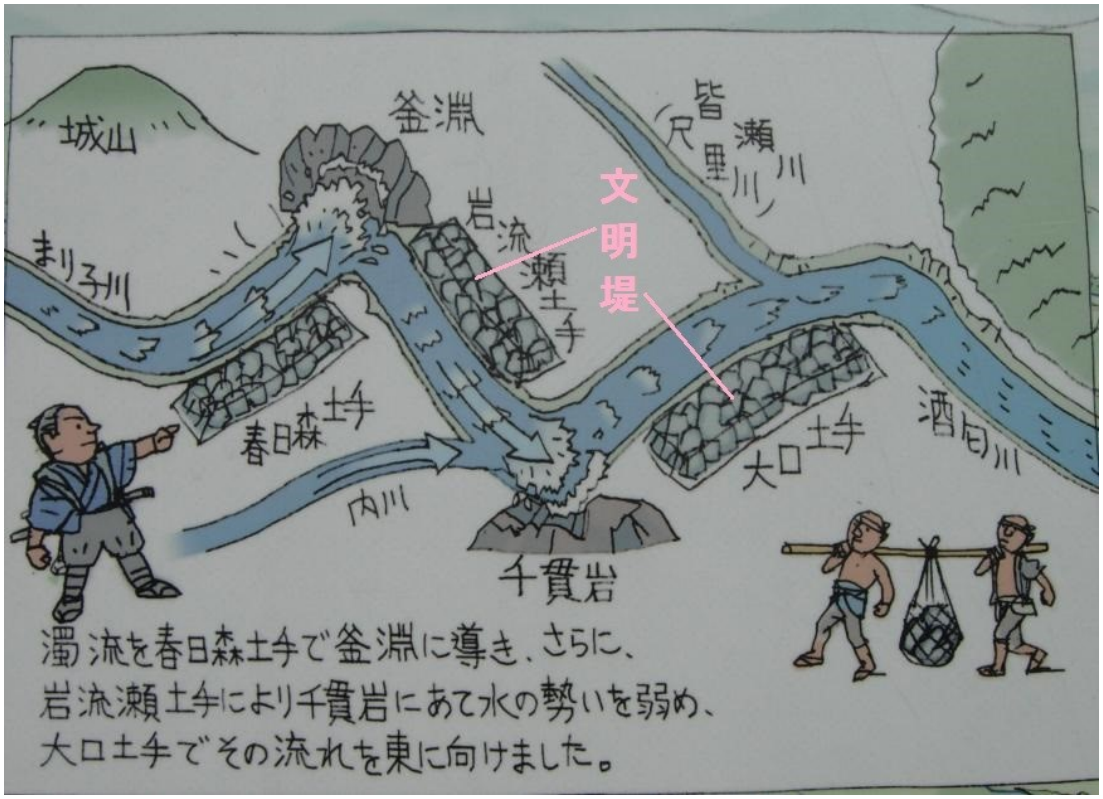
写真は、①大岡忠相（毛抜きで髭を抜くのがクセだったそうです。blog「Jack Dalton」掲載図）、②東海道五十三次川崎宿（Wikipedia より）、②酒匂川の治水（blog「水石を求めて酒匂川の氾濫」掲載図に細見加筆）

①

②

東海道
五拾三次内
川崎

③


城山
釜淵
皆瀬川
(尺里川)
文明堤
岩流瀬土手
まり子川
春日森土手
内川
千貫岩
大口土手
酒匂川
濁流を春日森土手で釜淵に導き、さらに、
岩流瀬土手により千貫岩にあて水の勢いを弱め、
大口土手でその流れを東に向けました。